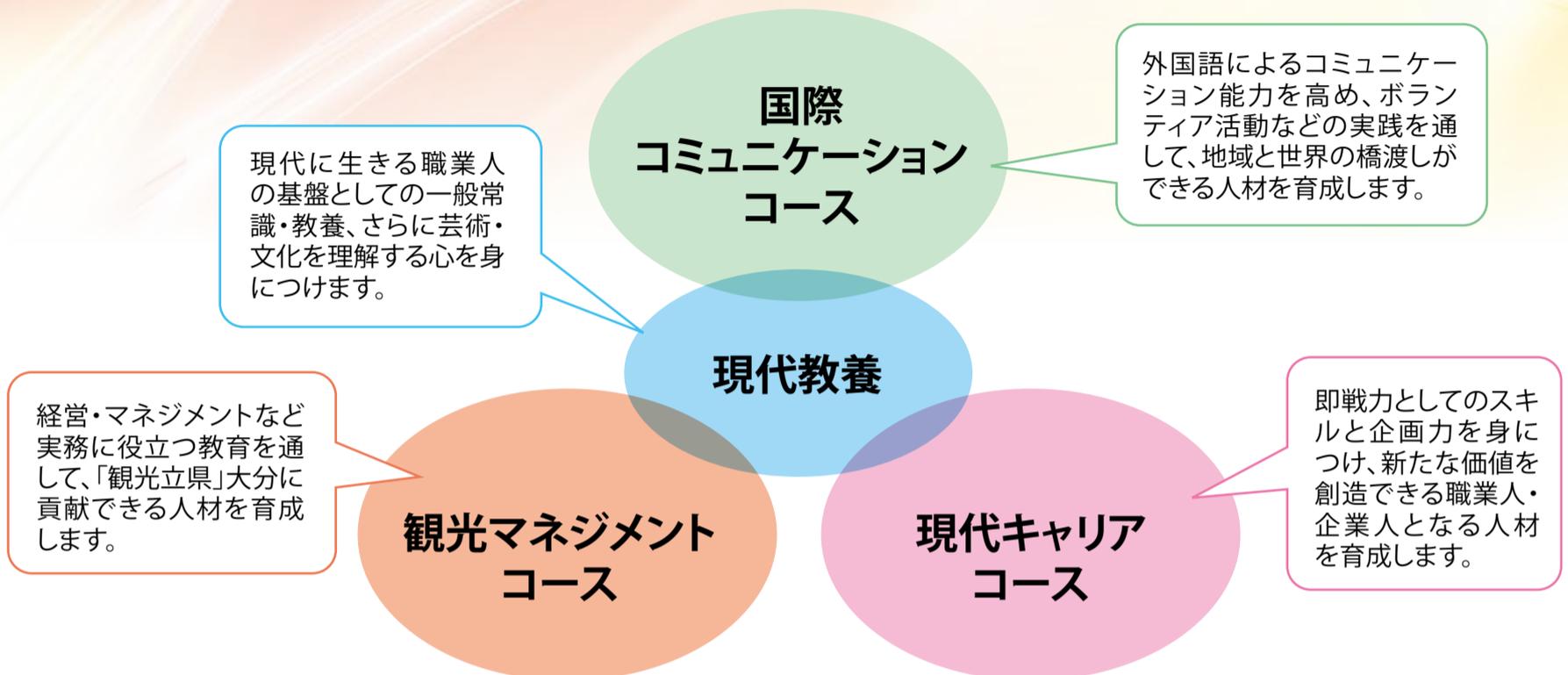


新しくなる

国際文化学科

(平成25年4月から**国際総合学科**の名称に変更予定です)



全国随一の国際的キャリアを育成し、地域に貢献する公立短大へ

飛び出せ地域へ、世界へ

平成24年4月に創立20周年を迎える国際文化学科は、さらなる教育内容の拡充・発展をめざし、**国際総合学科** (仮称) へとリニューアルします。**現代教養**で、一般常識や基盤キャリア教育を通じて基礎力を身につけた学生は、各自の関心にしたい3つのコースのいずれかを選ぶことになります。**国際コミュニケーションコース**では、国際化・グローバル化に対応するための国際的視野とコミュニケーション能力を養成します。**観光マネジメントコース**は、観光業を中心に地域社会で活躍し、「観光立国・日本」に貢献できる人材を育成します。**現代キャリアコース**は、企業が求める企画力や実践的スキルの養成を柱とします。また、地域と一体となった活動や、海外での実習プログラムも充実させます。

充実のキャリア形成

各コースとも、それぞれのキャリア形成に必要な資格や検定の取得をサポートします。国際コミュニケーションコースにおいては、英・仏・中・韓の各種語学検定やTOEICのほか、国際秘書士の取得が可能です。観光マネジメントコースでは、旅行地理検定や世界遺産検定の他、観光実務士が取得可能となります。現代キャリア学科では、従来の秘書士や簿記に加え、ビジネス実務士などの資格取得を目指します。



学長コラム 教養とは何でしょう



中山 欽吾

似顔絵 / 柳野 郁子
(専攻科 造形専攻1年)

国際文化学科には、様々な科目が用意されており、豊かな教養を育む学科だと考えられています。ところで、その教養とは一体どんなものなのでしょうか？皆さんは小学校時代から今まで、様々な事を勉強して学びとってきました。その学んだことは、知識となりますが、知識が多いことが豊かな教養を持つことになるのでしょうか。

半年ほど前にキャリアプランニングという授業で、『頭の引き出しを増やす』というお話をしました。答えの与えられていない問題があると、その答えを見つけ出すために人はどのような方法をとるかというお話の中で、頭の引き出しを沢山持つことが、答えを探す大きな力になるのだと言ったのです。そこで言う『頭の中の引き出し』こそが教養の本体だと思います。

つまり教養とは、ため込んだ知識を応用できる形に変えて、いつでも使えるように準備ができている状態をいうと考えるのです。これを「頭の中を耕す」という風に考えるのが英語で言うカルチャーという

言葉です。通常、文化と訳しますが、動詞のカルティベイトは耕すという意味で、このカルチャーという言葉には教養という意味もあります。つまり引き出しの中には一度知識を耕したあとで入れておく、それが教養の正体であり、文化でもあるのです。

ではどうすれば知識を耕すことができるのか。私は、そこに右脳の役割があるのだと思います。左脳で得た知識を右脳の助けを借りて耕して、引き出しに蓄えておく。だからこそカルチャーが文化という訳にもなるのではないかと思います。教養は、リベラル・アーツとも言います。リベラルとは「専門に偏らない」、アーツとは「経験を通じて習得するもの」をいい、ただ物知りというだけでなく、その人が持つ素養が知識に加味されていることは明らかです。このような抽象概念の熟語は明治期に外国語を和訳して作られたものが多く、その語源をたどると真の意味が浮き彫りにできるわけです。国際文化学科が芸術系学科と共存する意義は大きいと言わなければなりません。